【資料紹介】

翻刻『伊坂新輯』

要木純一
（島根大学法文学部）

摘　要

島根県立図書館入谷文庫所蔵の『伊坂新輯』（コピー）は、明治十六年頃に、おそらく松江で発行された、漢詩同人文芸誌である。明治初期の出雲漢詩壇をうかがう上で貴重な資料であり、ここに翻刻する。

キーワード：伊坂新輯、平賀静遠、渡部竹園、出雲漢詩壇、明治初期

故入谷仙介島根大学法文学部名誉教授（一九三三～二〇〇三）の旧蔵書は、島根県立図書館に入谷文庫として収められている。私はかつて、その日本漢詩文関係の資料整理に預からせて頂いたことがある（『島大言語文化』第二〇巻　九七～一二〇頁　二〇〇六年三月「島根県立図書館蔵　入谷文庫　日本漢詩文関係資料目録」）。その中には、世に知られぬテキストが多数ある。この『伊坂新輯』のコピーも、原本の所在がわからぬまま正体をつきとめずに時を移していたが、明治十年代の、山陰地方の漢詩壇の状況を知るために貴重な資料であり、将来の原本発見を期待して、ここに翻刻紹介する。

コピーは全十枚（整理番号　入ファイル①3―B　一二五六）。原本の情報については何も記されていない。「渡邊忠男蔵本」の所蔵印が見えるので、米子の人、渡邊忠男（漢詩人）の蔵本であったと思われるが、調査不十分で現在の消息はわからないままである。選者の一人平賀静遠（半助。一八八三没）は、明治初期出雲漢詩壇の中心人物で、かつて私も、「『風月小誌』『風流新誌』・篠田謙治『松江竹枝』」（『出雲文化圏と東アジア（アジア遊学　135）』　芦田耕一・原豊二編　勉誠出版　二〇一〇年七月　所収）で言及したことがある。本文末尾近くに「故平賀静遠」として、平賀静遠の七律二首を引き、「癸未五月男卯之助代先人書之」（癸未は西暦一八八三年）と記しているので、この書は平賀静遠没後まもなくに出版されたことと推測される。もう一人の選者渡部竹園は、伯耆の人として、『風月小誌』等に散見するが、未詳。あるいは、竹園の号で知られた渡辺恭平（一八四二～一八八六。米子の医

者・漢学者。『鳥取県大百科事典』所収）と同一人物かとも考えるが、姓の字が違うのが不審。題簽や見開きの題名には、それぞれ「巻之上」、「巻上」が付されており、下巻の存在が推測されるが、内容はこのコピー十枚で完結しているようであり、全貌はよくわからない。当時、松江を訪れた岡本黄石（幕末から明治の漢詩人）の題字、碧湖（小豆沢碧湖か。明治松江の画家）の宍道湖図が収められた後に、本文が開始する。すべてで、七葉表裏。但し、第六葉については、魚尾の葉数が「五」に誤っている（したがって「五」の葉数が重複する）。末尾に正誤二件が付され、書誌情報は載っていない。裏表紙のコピーはない。『伊坂新輯』の命名の由来、詩人達の出身地・経歴等、調査すべきこと、論ずべきことは沢山あるが、準備が不足しているので、後日を期したい。

翻刻については、内容を正確に伝えることに重きをおき、字の配置や大きさなどのレイアウトは、原典を再現することに意を注がなかった。たとえば、作者名の下の小字注を本文と同ポイント、同行にした。原文は詩の部分のみ句点が施されているが、凡例や評の部分も要木が施した。傍点は、評の内容にかかわるのでできるだけ原文通り振ったが、印刷のかすれ等で明らかに欠けていると判断したものは、特に断りなく補った。原文では、「己」、「已」、「巳」字の区別等明確ではないが、文脈により適宜正字に改めた。便利のために、作品に連番をアラビア数字で振った。漢字の表記は常用漢字体を基本としたが、一部、誤解を避けるために、旧体字のままにしているところがある。「蘆」、「芦」等字体が混在している場合は、原文通りにした。【　】内に要木の説明や校訂を加えた。

【表紙・題簽】
平賀静遠先生
渡部竹園先生選
　伊坂新輯　巻之上【大字】

【表紙裏・凡例】
　凡例
一本篇非敢販鬻焉者。唯頒之遐邇投寄諸君而已。
一本篇稿本一随投寄而録之。然剽窃其古句及他人詩者、一切削之。且載鴨山、風月、風流等誌者、亦不収録。不欲其複出也。
一本篇詩順次、独以選者胸臆定之。如其批点、前巻唯係選者之所加。後巻並載山村、渡部二翁之所下。

【岡本黄石題字】
天与閑【篆刻】
渡邊忠男蔵本【蔵書印】
驪珠【一葉表裏にわたって題字】
黄石題【大字】
廸吉甫【篆刻】　黄石髯叟【篆刻】

【見開き・宍道湖の絵】
袖浦夕照　明治癸未之夏　碧湖
泉印【篆刻。泉字不審】　石印【篆刻】

【本文】

伊坂新輯巻上

平賀静遠

渡部竹園　選

1自明石抵浪華舟中　倉鋪春山帆影依微掠淡山。漁歌断続島雲間。松青沙白看将尽。月掛須磨第幾湾。

河野苔洲云。明石実景。　渡部竹園云。実況宛然。語亦流暢可誦。

山村勉斎云。半入画、半入夢。　坂本蘭窓云。如身在其境。

2春夜感懐　自註　謝安蓄清雲朗月二妓　勝田睡仙

柳外清流花外峯。麗都猶記旧遊蹤。春風一夜吹痴夢。恍看東山雲月容。

苔洲云。三四意想絶佳。　平賀静遠云。流麗温雅。七絶能品。

中村笠山云。音調軽麗。且東山二字湊合妙。　勉斎云。苟有情者、誰無此感。　蘭窓云。合作。

3秋日散策　三島睡雨

閑遊半日晩初帰。沿岸漁家半掩扉。芦白蓼紅斜照澹。一川秋色映人衣。

苔洲云。全篇合作。三四流暢。　勉斎云。温柔句調。其人可想。

静遠云。三四如見。　竹園云。真是有声之画。　蘭窓云。詩家真趣。往々在村野間。

4東都雑吟　石上松園

飛鳥山頭花欲燃。狐王廟畔草如烟。遊人已去斜陽寂。一抹紅霞倒映天。

苔洲云。亦復実景。　勉斎云。使人喚起往夢。　竹園云。似竹枝。

5蝦夷人　仝

八月蝦夷寒刺肌。家々早已授綿衣。土人不厭風霜緊。赤脚窺魚立石磯。

苔洲云。風土之異、宛在目睫。　竹園云。風土之詩、宜如是。

蘭窓云。真蝦夷人詩。其情状可想。

6板井原道中　倉鋪春山

千尺危崖勢欲崩。渓雲繞脚路崚嶒。深山五月猶春色。白処桜花紫処藤。

苔洲云。僕去年輿疾自京師帰、時方五月初旬、板井原、根雨途上、往々見桜雲藤浪于松杉雑樹之間。今誦此詩、恍如重過其境。　蘭窓云。能言不経此地者則不解此味。　竹園云。奇抜。

7分郡橋即目　犬山石榴

枕水層々両岸楼。々々倒影落清流。今霄乗月納涼客。半在橋頭半在舟。

笠山云。此松江夏夜之真景、而僕楼命曰橋声舟語之処、尤共此涼況者。　蘭窓云。一二天籟、三四人籟。

8乃木濱即矚　仝

雨晴三十六湾々。明鏡光凝杳渺間。隔岸夕陽将尽処。落霞紅襯鰐淵山。

苔洲云。濃錦真景如画。　勉斎云。実況宛然。　竹園云。如画。

蘭窓云。写得妙。

9西村某転任之江州。別後有此寄。　松田淞雨

縹渺烟波遙客途。別来誰与共清娯。琶湖金鯽伝天下。孰若松江巨口鱸。

苔洲云。不免偽唐之目。　静遠云。三四軽妙。　笠山云。琶湖之金鯽、松江之銀鱸、晋秦匹敵、詩人之権衡、亦可喜矣。　勉斎云。愛名山者、果入何処耶。　蘭窓云。取鱸乎。取鯽乎。吾取鱸。

10春夜即事　吉儀秋海

桜雲籠月々朧明。夢醒幽窓夜幾更。何処楼台筵未散。風伝嫋々管弦声。

苔洲云。春夜諸作、並皆佳。此篇最流麗。　竹園云。幽窓聴艶声、却有味。　笠山云。予楼居隔水而有花街。毎深夜夢醒、乃聴鄭声、如三四所言。故深見此詩之妙。詩之貴実際可以知已。　勉斎云。実然。余曽宿八杉先鐘楼、独夜夢醒、事在二十年前。遽然回想。　蘭窓云。三四妙甚。

11初夏偶成　池尻含春

満山新緑滴牕櫺。細雨瀟々昼掩扃。花落花開春若夢。杜鵑声裡閲茶経。

【櫺はもと擂に作る。正誤に因りて正す】

竹園云。茶経字下得不苟。　笠山云。陸羽之忠臣。　勉斎云。笠山翁悪其不為杜康之忠臣乎。　蘭窓云。初夏之景況写得好。

12孔明耕隴畝図　小堀武岳

簇々塵氛満太空。孫曹何事謾争雄。誰知鼎足三分業。已熟当年隴畝中。

勉斎云。熟字用来有力。　蘭窓云。孔明亦応首肯於地下乎。呵々。

13秋夜聴虫　倉鋪春山

虫声唧々和檐鈴。枕上残燈瘦似蛍。休向深閨訴愁事。佳人独夜不堪聴。

笠山云。我猶不堪聴。況深閨思婦乎。詩人之用意、蓋如此。　蘭窓云。読之一過、愁情頓起。

14春詞　村上小琴

佳人深坐遅郎過。奈此纏綿暗恨何。翡翠重簾不堪捲。梅花細雨暮寒多。

勉斎云。視之公子行。可謂短刀直入。　竹園云。好春詞。使読者自起艶情。　笠山云。辞婉情深。無窘苦之態。真得春詞之体者。　蘭窓云。山民口吻。

15浴後作　田中発斎

浴罷凭欄一事無。疎簾半掲撚吟鬚。松間擎出前峰月。宛似双龍争玉図。

勉斎云。奇図。　竹園云。奇想。　蘭窓云。浴後観月、其快亦可想。

16夏日閑居　宮脇栗堂

深々庭院漏声遅。緑樹陰中雨霽時。枕上擎書和夢読。此間幽味少人知。

竹園云。仙境。　笠山云。其詩如此、其人可想。　勉斎云。其人則宛然独無外物引者。　蘭窓云。佳作。佳調。此詩佳味、亦少人知。

17春夜　高橋春流

春色悩人眠不成。半簾花影月三更。微風攪破栖鶯夢。梨雪堆中乍一声。

【堆はもと推に作る。今正す】

苔洲云。這般風情、不啻一刻千金。　竹園云。細膩可愛。　笠山云。金衣公子、豈欲学烏鵲耶。　蘭窓云。如不経錬磨而成者。

18秋江夜泊　村上小琴

楓葉荻花秋峭然。空江月冷不堪眠。琵琶一曲千行涙。又湿青衫憶楽天。

苔洲云。質直。　笠山云。事已似白楽天。詩又似白楽天。　蘭窓云。流暢可愛。

19到浪華舟中　平林緑香

目送飛禽接翅還。遠鐘声度暮烟間。揖夫遽告浪華近。燈焔遙明天保山。

勉斎云。潚然、爽然。　笠山云。一読、恍然如身航明石海而向浪華港口矣。　又云。作燈火光連如何。　蘭窓云。一読、光景宛然如覩。

20秋江漁父図　三島睡雨

潑剌鱸魚上釣竿。船頭吹火暮江寒。稚児沽酒帰来晩。月白芦花十里灘。

竹園云。有趣。　蘭窓云。佳品。

21咏胡枝花　佐草翠石

凄風冷露欲消魂。午枕紅留三寸痕。最是多情悩人処。柔條裊娜月黄昏。

竹園云。悽愴自有悲秋之意。　蘭窓云。命意造語極佳。

22春昼　勝田睡仙

春院深沈軟午風。落花無力点簾櫳。夢魂栩々追胡蝶。迷在艶雲香霧中。

竹園云。流麗、晩唐口気。　勉斎云。何春色悩人乎。　蘭窓云。全璧。

23寒月　宮脇栗堂

禿木枝頭凍月団。満庭霜気夜将闌。中秋過去無人賞。唯有吟翁袖手看。

竹園云。袖手字下得妙。　勉斎云。自僕等山間之客観之、則文外聞老狐之声寥々峭々。　蘭窓云。怯寒翁袖手状如覩。

24冬日煎茶　仝

寒雲散尽夕陽鮮。起掬渓流手自煎。軽暖忽生紙窓下。凍蠅皷翼破茶烟。

竹園云。宋人佳境。　勉斎云。余亦云。蓋自三四也。　蘭窓云。三四奇警。

25寒江夜泊　佐次春渓

帰来釣艇繫崖松。不識中宵雪圧峯。月落烏啼天欲暁。篷窓和夢聴寒鐘。

静遠云。夜泊情景、宛然如覩。　笠山云。翻用楓橋夜泊之意亦好。

蘭窓云。道得自有風致。

26宿奈良　相見湘雨

鳴鹿呦々夜奈何。満窓霜気客愁多。秋高三笠山頭月。想見晁卿望国歌。

蘭窓云。三四、無限意思。

27竹窓午睡　平林緑香

午睡昏々与枕親。囲窓嫩竹翠陰匀。愛渠似警吾疎懶。颯々清風吹夢頻。

【匂はもと句に作る。正誤に因りて正す】

竹園云。竹風警疎懶、新奇。　蘭窓云。三四奇警。

28錦海釣遊　石上松園

烟波影冷荻蘆秋。聞説此間鯊上釣。香餌携来趁晴日。一竿夕照座軽舟。

笠山云。予亦曾為此遊。屈指已二十年矣。今読此詩、神孤飛乎錦海。　蘭窓云。一気呵成也。有味。

29過多賀城墟　仝

瓦坏埋処惨雲垂。多賀城墟鳥語悲。満野茫々秋草外。夕陽影裡読残碑。

笠山云。感慨溢于字句之外。　勉斎云。設使高山彦九郎遇此況、号哭之声動四辺。

30春夜即事　花井復軒

軽寒脈々襲吟身。孤座幽窓有影親。淡月悩人眠不得。桜雲梨雪一簾春。

竹園云。似閨詞。　勉斎云。盍秉燭遊。

31渓辺夜遊　宮川朗斎

茶後不眠心爽然。半宵移杖歩渓辺。清閑恰若遊仙境。静聴涓々月下泉。

笠山云。是茗仙之佳境、酒仙之所不知。　勉斎云。不知為不知、是知也。　蘭窓云。一読冷然。

32正平塚　足立盤嶽

路上桜花飛作塵。叫禽也似慨西巡。残碑剥落正平字。応是勤王殉国人。

竹園云。第二句、恐欠錬鍛。作我来弔古併傷春、何如。　笠山云。勤王殉国、視乎塚中之人。何等奇想。恨不清々読之矣。

33春雨　山本習斎

春天曀々雨糢糊。煙裡峰巒澹欲無。一枕眠回日過午。隣翁有約隔花呼。

勉斎云。一二是画、三四是夢。　蘭窓云。流麗可誦。

34春月　小原犀香

風襲衣襟夜不寒。幽庭帯酔独蹣跚。可憐一片朦朧月。人在海棠花下看。

笠山云。流麗可誦。　蘭窓云。同感。

35秋日吟行　白谷楓江

秋霽曳筇吟且行。郊村十里夕陽明。也知僻邑文華洽。隔水家々誦読声。

勉斎云。路上、枕上、真詩府。　竹園云。方今日向開明、是実際之語。

36春暁　佐藤静江

暁色依微猶未分。梨花残月護香雲。幽人未肯収衾枕。一囀流鶯帯夢聞。

蘭窓云。不覚暁。宜矣、帯夢聞。　勉斎云。帯夢作夢已、如何。

37春夜　勝田睡仙

衾爐暖処睡将成。掌上残書墜有声。最是梅窓深夜月。暗香疎影逼人清。

苔洲云。春初夜興、使人想像不已。　静遠云。似楊誠斎声口。

竹園云。最作好、如何。　勉斎云。恐是陳套。　蘭窓云。三四写得春夜景逼真。

38蘭菊合図　山本習斎

菊瘦蘭香清又奇。写来秋色両相宜。畢生不肯因人熱。笑立西風弄逸姿。

静遠云。淡々下筆、却有味。　勉斎云。西風冷字。換頭下得妙。
蘭窓云。真是良友。

39冬日松江雑詩　勝部碧峰

舟下寒流暁売鱸。時看宿雁出枯芦。江雲散尽天如水。漁笛一声残月孤。
竹園云。松江実況。

40初夏偶成　村上小琴

黄梅時節昼蕭然。疎懶最宜貪午眠。芳事茫々去無跡。杜鵑声裡雨如烟。
勉斎云。可吟。　蘭窓云。歳月不待人、可嘆矣。

41紫宸殿　足立盤嶽

禁園深鎖鳥声頻。四顧寥々不見人。鳳輦不回環珮絶。玉階桜樹為誰春。
竹園云。多少低回、以平穏之語述之妙。　蘭窓云。無限感慨。可謂真佳作矣。

42懐古　新見袖湖

往事茫々水上漚。消魂今日涙空流。望中無復繁華跡。狐火吹青枯草秋。
静遠云。一読惨然。　勉斎云。故悪夫四十五十而無聞者。　蘭窓云。今古同感。

43山亭鎖夏　島　苔園【鎖は当に銷に作るべし】

茅屋三間倚緑陰。潺湲流水洗塵心。莫言夏日難消得。已対棋枰又弄琴。
静遠云。合作。　蘭窓云。琴棋消日、高人幽趣、可羨。

44偶成　野津温斎

人生在世似蜉蝣。富貴功名何用求。幽事従容須送老。餘年日入酔郷遊。
竹園云。閑中富貴如此、何復他求。　笠山云。同感。　蘭窓云。果有此心。可謂英傑矣。

45壬午新年　佐藤静江

夜市声収已暁天。日旗影閃入新年。寒厳梅柳無春色。瓶裏閑花愛水仙。
竹園云。平淡有味。　勉斎云。愛作瘦、何如。

46廃邸看花　宇山麗水

園荒臺損歴年来。満逕蕭々没緑苔。独有杏桃存旧様。春風無恙逐番開。
勉斎云。唐詩換骨。　竹園云。多少感傷。　蘭窓云。杏桃何無情。

47観楓　石上松園

日冷山間霜後風。停車好座夕陽中。渓泉一帯鮮娟底。雲錦紅涵両岸楓。
笠山云。巧者却失。　蘭窓云。何等好風景。

48冬夜泊舟　河津厚斎

半夜江天雪未収。篷窓月暗一燈幽。愁眠枕上疎鐘響。宛似楓橋夜泊舟。
竹園云。凄惋可誦。

49中元　小原犀香

雪尽長天夜色清。満庭涼露草虫鳴。孤斟憐此中元月。影在胡枝花上明。
苔洲云。恨乏奇趣。　竹園云。在中元児女喧闐之際、孤酌遣情。幽懐可想。　蘭窓云。僕亦太喜中元月。

50秋江晩釣　倉鋪春山

蘆花吹雪洒孤篷。残日光寒野岸風。移艇鴎辺閑下釣。一江烟水晩濛々。

静遠云。流暢可愛。　笠山云。其意在魚、而不在鴎。故可以伍矣。

蘭窓云。如画。

継響

51秋晩偶成　五首之一

園景荒蕪秋欲過。垂楊髪処夕陽多。小池清徹明如鏡。翡翠窺魚立敗荷。

52書窓雪

林静時伝折竹声。満庭積雪昼三更。読書易辨蠅頭字。間却窓燈一夜明。

故平賀静遠

癸未五月男卯之助代先人書之

53春日雨中

湘波簾外湿香塵。紫態紅容次第新。富貴花開応在近。一園雨暖玉棠春。

54秦始皇

封建規模尽削除。壮図千古有誰知。于今郡県伝遺制。莫是当年経略餘。

竹園生録近製

正誤

二葉裏四行目（擂）は、櫺之誤。

四葉表末行（句）は、匂之誤。

【終・裏表紙コピー無し】

この翻刻は、
山陰研究センター・山陰研究プロジェクト1302
山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト
期間：2013－2015年度　代表：野本　瑠美
による研究成果の一部である。
入谷仙介先生、ご遺族、島根県立図書館関係者のご学恩に感謝申し上げる。

補注

9の作者松田淞雨の淞は本湘に作る。今改む。

11の瀟は本潚に作る。今改む。

Reprint of “Isaka shinshu”

YOGI Junichi
(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

〔Abstract〕
“Isaka shinshu” in Iritani Colection owned by Shimane Prefecture Library was published in about 1883 in Matsue city. On this book we can see many Kanshi poems, most of which were made by famous poets who lived in Izumo district in early Meiji era. This is reprinting the book.

Keywords：Isaka shinshu, Hiraga Seien, Watanabe Chikuen, Kanshi poem, early Meiji Era